



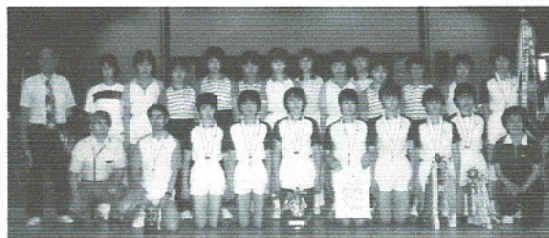




▲女子では1980年代に前本信愛女子高がバドミントン部を創設。30年に前本中央女子がインターハイを制覇。3年連続で前本勢が頂点に上った



▲団体戦初優勝した前本中央女子は高橋(左)と藤村(右)がダブルス優勝。藤村が決勝を争った高橋が優勝し、3冠を達成。翌年は3年生とどうも藤村が3冠を達成している



▲1982年には、男子で前本中央女子を破った前本信愛学院がインターハイを制覇。3年連続で前本勢が頂点に上った

の協会役員が3000人を超えて日本一となり、競技に取り組み子どもが増加。子どもがプレーを続ける環境が広く存在するようになった。その今の熊本県の強さの源と云える。マイナースポーツが盛況している際に課題となるのは、場所と人材(競技者・指導者)の確保。インフラを整えるのが、最も大変だ。その点で、県内に多くの人材を擁し、礎を築いた伊藤さんの貢献度は、特に大きかった。

工藤さんと権藤監督は、まったく同じプロセスで説明した。「伊藤先生の口癖が『種を撒き、苗を育てよ』でした」。

熊本県のバドミントンの歴史は、この一言に集約される。2021年度のS

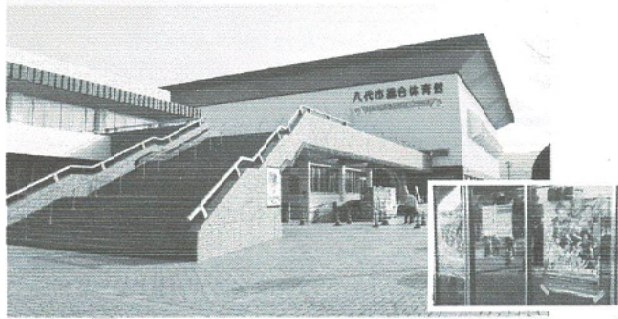
### 「井戸を掘った人」

どこまで尊敬できるかが指導者の力量。伊藤先生が種を撒き、本郷先生が苗を育て、私たちが以降の世代が実になった」

(工藤さん)

「Jリーグは、無観客開催となったため、会場に入れるのは関係者のみ。工藤さんは、その中に教えるが何人もいると話す。これが、僕の財産」と笑顔を見せた。県外選手に声をかけずに強化してきた自負もあり、井戸を掘った人をどこまで尊敬できるかが、指導者の力量。伊藤先生が種を撒き、本郷先生が苗を育て、私たちが以降の世代が実になったとも話した。

伊藤 本郷の両氏の下で強化を続けてきた熊本県は、1978年の長野国体で男子少年の部の団体優勝を果たした。このときのメンバーの一人が、現在八代東高校を率いている権藤浩二監督だ。後編では、権藤監督から見た熊本県の歴史と強さの秘密に迫る。



▲S/Jリーグ2021熊本大会は、前本市と八代市で開催。八代会場となったのは、八代総合体育館。男子の強豪校である八代東高校はすぐ近くだ



▲八代全県の開会時にあいさつした二藤さん。県協会の理事長を務めるなど熊本県のバドミントン競技発展に長年携わってきた

て教員。はじめは、教職員選手権や国体に出場する社会人選手として競技に注力していたが、30歳手前で指導者としての日本一に目標を切り替える。1974年に同校バドミントン部を強化クラブへ。伊藤さんから「信愛と中央」に受けたい指示の発行に取り組んだ。当時、県内で強かったのが、南直治監督が率いる熊本信愛女学院。直線距離で200メートルほどしか離れていない隣校だ。2校が県下の有望女子選手の進学先となり、競争のレベルが上がっていった。1980、81年に陣内貴美子を擁する熊本中央女子がインターハイ女子団体で優勝。82年に熊本信愛女学院が初優勝。翌83年は熊本中央女子が王者奪還。2強のうち県の代表になった方が全国で上位に進む流れを生み出した。他競技でも同じだが、県内に全国レベルの強豪校が複数ある都道府県は、どこが代表になっても安定して上位に進む傾向がある。このライバル関係は、熊本レベルが上がった一つの要因に挙げられるだろう。

後編で詳細を記すが、この少し前、伊藤さんの教え子たちが次々と県内にクラブを作り、小・中学生の育成に励んでいた。熊本中央女子で全国大会を10度優勝した工藤さんは、その強さの源について、こう語った。

「私は、ちょうど良いタイミングで高校を指導できて、ラッキーでした。最初は優秀な中学生が来てくれずに苦労しましたが、県内のクラブで育つ子どもたちが上がってきて、中学

生が全国大会で勝つようになり、どこも高校にも良い選手がいる時代になりました。例えば、陣内は中学生の頃からすでに強かったです」。

地元の子もたちが、競技を続けられる環境に。全国レベルで活躍できる選手が増え、熊本県バドミントン協会の後押しも加速した。県代表が活躍する団体の優勝を目指す強化策が始まったのだ。工藤さんは、当時の様子を次のように振り返った。

「2代目の県協会理事長の本郷前生先生が指導していた熊本商科大の体育館を年間60日借りて、少年の部、成年の部の両方で男女計50名ほどが集まって、17時から21時まで、コート8面を使って練習に取り組みました。1年でシャトル代が150万円かかったと聞きました。しかし、最初のターゲットが1978年の長野国体ではなかったかと思えます。最初は、まだ九州を勝ち抜けない状況でしたが、そこから九州で一番になり、全国でも勝つようになり成長していきました。本郷先生は元ラガーマンで非常に協働性があり、うまくまとめてくださりました。おかげで、県内のクラブや競技者も増えていきました」。

1975年に地元の熊本日日新聞が主催する熊日学童オリンピックが始まると、バドミントンも採用してもらえるように働きかけた。地元のメディアで大会の様子が報じられる人気大会で採用された影響は大きかった。小学生



# 熊本隆盛の源泉

後編



長年、バドミントン強豪の地として知られてきた熊本県。果たして、なぜ熊本でバドミントンが盛んになったのか。その歴史と育成環境を探るべく、熊本バドミントンの歩みに精通する二人の関係者から話を聞く。後編では、八代東高校で指導する権藤浩二監督を訪ねた。

取材・文/平野貴也 写真/EBM、平野貴也

熊本県は、なぜバドミントンが盛んなのか。前号では、熊本中央女子高校(現・熊本中央高)を全国大会10度優勝の強豪に育て上げた、1992年バドセロナ十五輪に出場した陣内貴美子さんや2008年北京五輪4位の前田美順さんら五輪選手を筆頭に、多くの選手を育てた工藤勇参さんの話を中心に歴史を振り返った。

最初の熊本国体(1960年)を機に、熊本女子大学の助教を務めていた伊藤基紀さんが中心となって、熊本県バドミントン協会を設立。成年、少年の強化が始まった経緯を語ってもらった。70年代後半から熊本の高校が全国トップクラスの強豪へ台頭した理由には、伊藤さんの号令の下で他地域に先駆けてクラブチームが誕生し、県内の子どもレベルが高まったという流れがあった。

熊本県の強化策の一つの裏切りが、1969年長崎国体における、男子少年の部優勝だった。そのメンバーの一人が、八代東高校の権藤浩二監督だ。九州学院高校に進み、2年時に熊本勢初となるインターハイ団体優勝を果たし、シングルス、ダブルスと合わせて3冠を達成。3年時も個人戦は連覇した。日本体育大でもインカレを制覇するなど活躍。熊本に戻ってからも社会人プレーヤーとして活躍した。指導者としては、若北高校で、全国高校選抜大会団体優勝。1992年に八代東高校に移ってからはインターハイ団体を2度(96年、98年)制したほか、2004年アテネ、08年北京と五輪に

権藤監督は、八代市の出身。最初の熊本国体の2年後、1962年に生まれた。実家近くの体育館で競技にふれるようになったという。

「実家の前が、十条製紙(日本製紙工場の体育館)でした。小学校低学年のころ、体育館を管理しているおじさんが、私たちが近所の子どもを誘って遊ばせてくれました。スプーツ用具が家庭には普及していない時代でも、体育館には、社員さんのレクリエーションで使ったボールやラケットがそろっていました。おじさんがバドミントンを気に入っていたのか、それで遊ばせてくれました」

実は、似たような形で大人と近所の子どもが競技を通してふれ合う機会が、熊本にはある。以前から社会体育という名前で行なわれている競技指導だ。学校の先生が指導する部活動ではなく、学校の体育館に地域の社会人が競技を教えるというものだ。権藤監督が通っていた小学校にも、十条製紙のバドミントン愛好家が教えにきていたという。権藤監督は、学校の部活動や近

隣の体育館で遊びの一つとして競技にふれていくうちに、のめり込んでいった。ただし、部活動は人数が多く、体育館ではほかの競技も打つため、2時間の活動でもコートで羽根を打てるのは一人あたり10分が20分程度。権藤監督は、小学5年生になると活動の場を移した。新しく入ったのは、下級生のころに遊んでいた十条製紙の体育館を拠点に活動していた八代ジュニアクラブだった。

幼少期から活動チームを選択できる環境があった。ここに、当時の熊本の育成環境の優れた点がかうかがい知れる。権藤監督が生まれた少し前、県協会設立をめざしていた伊藤さんは、県内のサークルを回って愛好者たちに協力を呼び掛けていた。そして、伊藤さんの口癖だった「種を撒き、苗を育てよ」という言葉を受け、伊藤さんに競技を教わった愛好者たちが、県内各地で子どもたちの育成を始めていた。



権藤浩二

ごんどう こうし / 1962年2月21日生まれ。熊本県八代市出身。八代第二中、九州学院高校を経て日本体育大卒業。高校では78・79年インターハイ単複優勝。大学では81・83年インカレ単複2位、82年インカレ復優勝、単2位。大学卒業後に教員となり、熊本第一高、芦北高を経て、八代東高に専職。96・99年に八代東高をインターハイ団体優勝に導き、現在まで多くの男子トップ選手を育てている。

を立ち上げ、熊本市では桜山中学校教諭の長野寛さんが育成に注力。近隣でバドミントンを楽しんでいる子どもも運動能力の高さが見られる子どもも勧誘し、クラブ活動に誘っていた。熊本県の子どもは、少しその気になれば、専門の指導者に教わることのできる環境にあった。権藤監督は、中学時代に野々口さんから競技の基礎を教わったという。

### 世界トップレベルのプレーにふれる刺激の意味

そして、次のステップを踏む環境も整っていた。象徴的なのは、県協会の初代理事長を務めた伊藤さんの取り組みだ。中学生だった権藤監督は、野々口さんに連れられて、県協会の練習に参加していた。

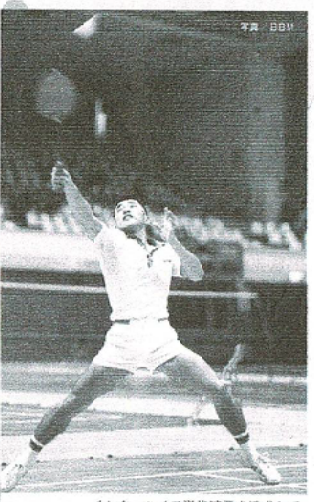
「熊本女子大の体育館に、伊藤先生の教え子である指導者が、教え子を連れて集まっています。伊藤先生が考案したメニューを、大人も子どもも、みんな覚えていました。バドミントンの練習だけでなく、独自のトレーニング機

器も開発されて、いろいろな体操、運動をしました。伊藤先生は楽しませるのが上手で、おもしろい方という印象が強かったです。伊藤先生こそ、バドミントンを熊本に根付かせた方。伊藤先生を抜きには語れません」

カテゴリーを分けて選手を集めて活動することで、子どもたちは自然に高い意識とレベルにふれ、上をめざすようになっていった。

さらに、伊藤さんは指導以外でも、普及や強化の環境作りを進めていた。日本協会の強化部に入ると、日本代表の合宿や、日英対抗戦などの強化試合を熊本県で開催。地元の子どもたちにもトップレベルのプレーを見る機会を与えた。全英オープン(当時は世界選手権)がなく、事実上の世界一決定戦で女子シングルスで4度制した湯木博恵

「目の前の体育館で、世界女王のプレーを見られた。よい選手、よい試合を見させてもらいました。当時の熊本で競技をしていた子どもたちにとって、間違いなくいい影響があった」(権藤監督)



インターハイで甲斐連勝を達成して、日本体育大へ進んだ権藤監督。写真は日付大時代。身長160センチと小柄だが、自身に負けない練習を課し、持ち前の競争心でトップ選手として活躍した

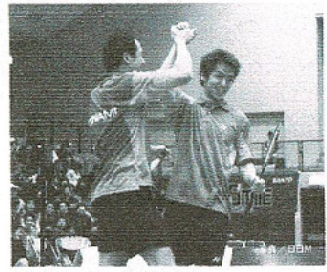




▲長崎県出身で、八代東高で通商の指導を受けた大塚忠司(右)は、外田圭太とのペアで2004年アテネ五輪、03年北京五輪にも出場。アテネ五輪では混合種にも出場した。現在は、日本体育大学バドミントン部監督として後進を育てる

▲園田圭佑(右)／葛村健士は、八代東高時代からペアを組み、オリンピック出場の夢をかきた。園田は熊本県八代市出身。葛村は佐賀県出身だが、調子を前面に出して戦うスタイルはまさに熊本仕込み

▲昨年12月の全日本総合でシニア男子の頂点に立った田中湧士も八代東高出身。高校時代には全国制覇を成し遂げたが、向上心を持ち続け、開花した



▲長崎県出身で、八代東高で通商の指導を受けた大塚忠司(右)は、外田圭太とのペアで2004年アテネ五輪、03年北京五輪にも出場。アテネ五輪では混合種にも出場した。現在は、日本体育大学バドミントン部監督として後進を育てる



▲昨年12月の全日本総合でシニア男子の頂点に立った田中湧士も八代東高出身。高校時代には全国制覇を成し遂げたが、向上心を持ち続け、開花した

### 時代の変化と選手流出の波

ジュニア年代の選手層が厚くなり、県内でしごきを削るうちに選手は上達。権藤監督の1学年上だった原口恵子さんが八代第一中から大阪の四條畷学園高校に進んで周囲を驚かせたが、このころはまだ全国から選手が集まる私立の強豪校が存在せず、県内に留まることが通例。県内の平均レベルが上がっていた。これが、工藤さんが話していた「この高校にもよい選手がいる時代」の正体だ。

70年代後半からは、インターハイで熊本県勢が活躍。78年に男子の九州学院、80年に熊本中央女子、82年に熊本信愛女学院、83年に熊本中央女子、89年に男子の熊本商科大付属(現・熊本学園)が団体優勝を飾った。

九州学院でインターハイ3冠を飾った権藤監督は、教師である西田淳二郎さんに憧れて教員をめざした。日体大を卒業して熊本に戻ってきたあと、いくつかのクラブがなくなっていたが、県内全体を見ればジュニアクラブは増えていたという。

しかし、二つの新しい波により、県

内出身者ばかりで熊本の高校が常勝を保つのは難しい時代になった。一つは、全国の他地域にもクラブが普及したこと。小学生年代から競技専門の指導者に教わる子どもが増え、熊本県の優位性は弱まった。もう一つは、優れた環境を用意して、全国から優秀な選手が集中する私立高校が増えたこと。権藤監督が1996年から、98年にインターハイ団体優勝へ導いた八代東高は、地元・熊本県から育ってきた選手たちに九州の他県からも選手が加わったチームだった。

日本代表に育った教え子も、園田は県内出身だが、大東は長崎県出身。葛村は佐賀県出身だ。強豪私立への対抗勢力として存在感を示した。それでも私立高の勢いが強く、2010年から15年までの6年間は、春・夏の全国大会で4強に入れない時期が続き、女子は09年から熊本県勢が4強入りでなくなっている。

しかし、権藤監督は「熊本の子どもレベルが下がった」という感覚は、ありません。それより、ほかの県が力をつけたことに、全国から集まるチームが出たことの影響だと感じます」と、高校チームの成績だけで推し量るのは適切ではないとの見方を示した。女子は、有望な中学生が県外へ出るようになり、県内の高校が苦戦するのは当然だ。一方、県内出身で青森山田高校へ進学した藤井瑞希(2012年ロンドン五輪銀メダル)、田中志穂、福島由紀(21年東京五輪ベスト8)らは、日本代表として活躍す

る選手に育っている。個の育成では、いまだ熊本の地盤は強さを見せている。男子の県外流出は少ないが、昨年のインターハイの男子シングルスで優勝した森口航士朗(埼玉栄)も熊本出身。昨年の全日本総合選手権で同種目を制した田中湧士(日本大)は、県内出身で八代東高OB。日本大は日本一になれなかったが、あとから成績が付いてきた。

### 指導者から次の指導者へ受け継がれていく思い

早期に築かれ、育まれてきた育成の基盤は、強固だ。熊本中央高で指導を続ける工藤さんが「簡単に崩壊しないと思います」と胸を張ったように、育成インフラは、国内でもトップクラスと言える。

ジュニアクラブからの進学先として男子は八代東や九州学院があり、女子は八代白百合学園や玉名女子など新たな勢力も合流している。社会人は、女子のNEC九州、ルネサスのチームを再春館製薬所が引き受けたことで、今回のS/Jリーグ開催のように、ハイレベルなプレーを見られる環境を確保。現在は、日本バドミントン協会が2023年を目標にBWF

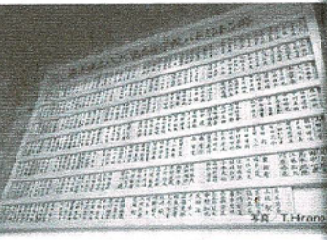
### 「今でも熊本からよい選手が出続けている」といふことは

「バドミントンを好きな人たちの思いが脈々と受け継がれているのかなと思います」(権藤監督)

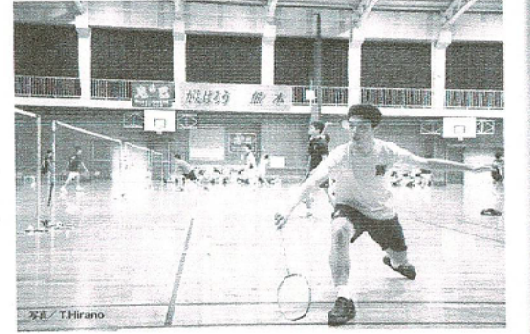
ワールドツアーSUPER500クラスの大大会を熊本県に誘致する方針を表明しているところでもある。しかし、「購れる者久しからず」の言葉もある。変わりゆく時代に対応するためには、工夫を続けなければならぬ。

日本バドミントン界は、この10年ほどでトップが大きく成長し、世界の頂点をねらう立場になった。以前とは求められるレベルが違う。さらに、又科省は、学校教育における部活動を廃止する方向に動き出しており(教員の負担軽減等が理由)、今後は専門性の高いクラブ、指導者の重要性が増しそうだ。部活動に専門指導者を招く場合には、学校との連携も必要。新しい環境を作らなければならない。

権藤監督は、ジュニア時代の指導者の功績を称えながらも、高校世代を見ていて気になる点を次のように話した。「数年前ですが、熊本県のジュニア世代がナイロン製シューズを使っていることを知り、大人と同じ水鳥の羽根に変えてもらうように働きかけました。他県に比べて子どもも競技人口が多いことで一定の成績を出してきましたが、あくまでいかしてしまっただ部分もあるのではないかと思います。今は、他県を



▲八代東高の体育館には、全代がオリンピック出場選手、歴代の名バドミントン部員の名札と名札と並べて掲げられている



▲体育館に掲げる部員「名札」には、引継ぎまで自分自身に負けないようにプレーしてほしいという権藤監督の思いが込められている。この部員に守られながら、今も多くの高校生がシャトルを打ち、汗を流している

見ても、より専門的に教わっている選手が伸びています。間口を広げる部分は継続しながら、今後は実業団等で活躍した人たちが指導者として組み入れて、「世界の最先端を知り」専門的に教える部分も強化できれば、もっとよい選手を育てられると思いますし、熊本がそう変わっていくべきではないかと。権藤監督自身は、今年で教員として15年の定年を迎える。再任用でまだ数年は指導に携わる見込みだが、後継者作りもテーマと捉えている。高みをめざせば、課題は尽きない。しかし、熱意を持って取り込む競技経験者を多く生み出してきた歴史は、次の環境作りにおいても大きな力となる。権藤監督は、次のようにも話した。

### 「県内に熱心な指導者が多く、私たちが早い時期から、そういう方に出会いました。ただ、ほかの県でもクラブができて、今ほどの地域からよい選手が出るかわかりません。それでも、まだ熊本からよい選手が出続けている」といふことは、バドミントンを好きな人たちの思いが脈々と受け継がれているのかなと思います」

熊本バドミントン界の基盤は、伊藤さんが作り出した。競技者が刺激を受けて高みをめざす「コミュニティ」だ。人材育成の成果は、競技成績だけに限らない。次の指導者や協力者、理解者を増やしていくことも意味する。豊かな育成の土壌が、次世代にどう受け継がれていくのか、楽しみだ。